

(グランパレ国立ギャラリー ホームページより)

2017年9月14日記事 by Nathalie Gillart

## アーヴィング・ペンと三宅一生：友情と協働

グラン・パレにて開催の「アーヴィング・ペン」展の出品作品のうち3点は、80年代末に生み出された、かの有名な「プリーツ」と、モードと新技術を融合させたミニマリズムなコレクションで世に知られる日本人クリエイター、三宅一生へのオマージュである。その三宅が、グラン・パレでの本展に合わせペン氏について語った。

「私が初めて彼のことを知ったのはアメリカの雑誌を通してです。彼の写真が持つ力と美に引きつけられました」。直に出会う前から三宅はすでにペンの仕事に気づき、注目していた。一方、ペンは1983年に初めて三宅の服をカメラに捉え、三宅の仕事に関心を持った。そしてその後の1986年より、ふたりの緊密な協働と長きにわたる友情が始まった。

13年にわたってふたりのコラボレーションは続いた。三宅はペンに全幅の信頼を置いていたので撮影には立ち会わなかった。「我々は協働し、友人になりました。我々を結びつけていたものは尊敬の念でした。彼

のレンズによって捉えられた自分の服を見ることは私に再発見をもたらし、それによって私はさらなる創造のための大きなエネルギーを得ました。私のクリエーションもまた彼の心に触れていたならよいのですが...」。

ふたりが互いに触発し合っていたのは明白だ。ふたりの協働作品を見ると、ペンの写真の特徴である顕著なグラフィック性と三宅の服の特徴である構築的で幾何学的なシルエットが共鳴し合っているのが分かる。彼らは互いをどこまでも深く理解し合っており、互いの芸術性が対話していると感じられる。三宅曰く「私はペンさんのことを念頭に置いて服づくりをしていたわけではありませんが、しかし彼からは常に大いに触発されていました」。

このふたりのアーティストの協働と友情は極めて緊密かつ深いものであり、彼らの協働に敬意を表する展覧会が 2012 年に東京の 21\_21 DESIGN SIGHT で「アーヴィング・ペンと三宅一生 Visual Dialogue」と題して開催され、アーヴィング・ペンの写真作品 250 点が展示紹介された。

最後に、グラン・パレでの本展で展示紹介される三宅へのオマージュ作品 3 点とは、光と影のコントラスト

が見事な三宅一生のポートレート（1998年）と、「階段プリーツ」（1994年）、そして本記事上段掲載の「Two Miyake Warriors」（1998年撮影）である。しかとご覧あれ。